

まちづくり推進組織関係者 ワークショップの実施結果

第1回 WS 平成29年11月6日実施

第2回 WS 平成29年11月27日実施

第3回 WS 平成30年1月17日実施

対象

まちづくり推進組織等で活躍中、または活動を経験された方（各回定員50名）

川崎市市民文化局コミュニティ推進部協働・連携推進課

(ワークショップの様子)



時代ごとの特徴

<1990年以前>	<1990年以降>	<2000年代以降>	<2010年代以降>
<ul style="list-style-type: none">・町内会など地縁によるコミュニティや行政主導の取り組みが主の時代・区民懇話会→要望を伝える活動	<ul style="list-style-type: none">・区づくり白書の作成<ul style="list-style-type: none">→市民が意見を出し合い形にすることの大切さを感じた→市民が必要な活動を考え、自ら実践することにつながっていた・阪神淡路大震災時による市民活動・ボランティアの活発化・市民健康の森も各区ごとに市民参加で組織づくりからスタートした好例	<ul style="list-style-type: none">・都市マスタープランの市民参加<ul style="list-style-type: none">→丁寧な参加の場があった→まちづくり推進組織へのつながる機会・中間支援への移行のジレンマ（2006～8年頃）<ul style="list-style-type: none">→課題解決に取組みたいが支援する側にまわることに	<ul style="list-style-type: none">・東日本大震災発生以降は、より小さな単位でのまちづくりへの参画、自助の必要性が高まる・市民がネットワークやスキルを生かして連携し身近な課題に取り組む時代

キーワード

・区ごとの中間支援の必要性

- 地域レベルの小さな活動を支援することが大切
- 中間支援と実践活動の本質的な連携関係づくり
- 中間支援には専門性の高いスキルやしぐみ・予算が必要（活動は無償でいいのか？）

・組織間の連携・パートナーシップのあり方を考える

- 町内会・自治会との効果的な連携が大切
- 行政との効果的なパートナーシップ、市民協働の裾野のさらなる拡大

・7区で情報を共有し交流する機会や場は大切

- 市民自治創造・かわさきフォーラム（H14～20）は7区を巡回して開催
- 互いの活動を学び合う交流会の自主開催

・まちづくり推進組織の世代交代の必要性

- 若い人にいかにつなぐか？後継者をいかに育成するか？
- 若い人の人材発掘・育成、若い人に伝わるPRの工夫が必要（SNSの活用など）
- 新しい人材が活動できるしぐみや環境をつくるのが大事
- 多世代が継続的に自分のまちづくりに関わることを支えられる仕組み（専門のコーディネーター機能や参加制度など）

・活動エリアはより小さく～中学校区ぐらいのエリアに拠点があると良い

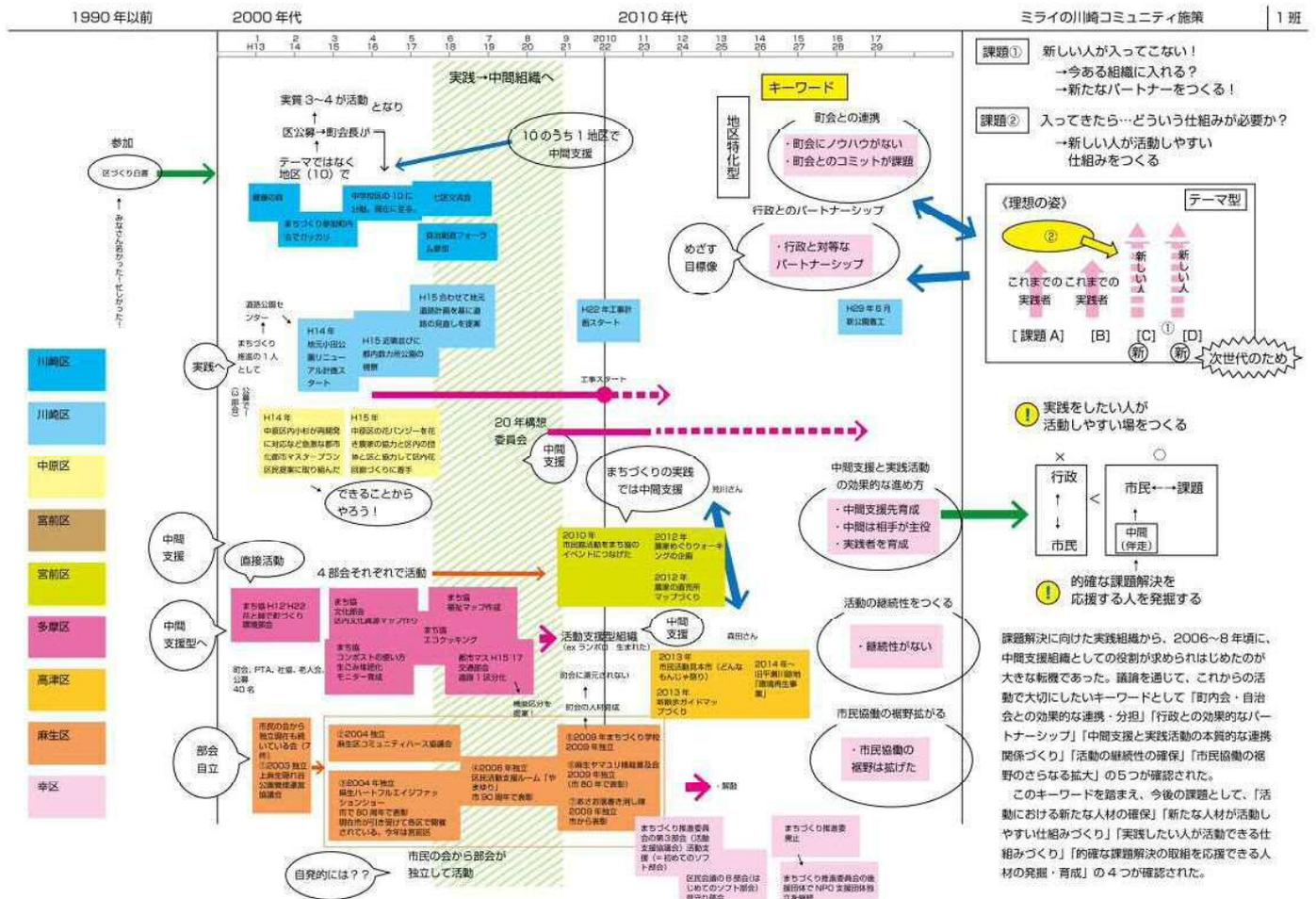
- ※コミュニティの拠点、市民活動の拠点

各グループのまとめと作成した年表

1 グループ

課題解決に向けた実践組織から、2006～8年頃に、中間支援組織としての役割が求められるようになったのが大きな転機であった。議論を通じて、これからの活動で大切にしたいキーワードとして「町内会・自治会との効果的な連携・分担」「行政との効果的なパートナーシップ」「中間支援と実践活動の本質的な連携関係づくり」「活動の継続性の確保」「市民協働の裾野のさらなる拡大」の5つが確認された。

このキーワードを踏まえ、今後の課題として、「活動における新たな人材の確保」「新たな人材が活動しやすいしくみづくり」「実践したい人が活動できるしくみづくり」「的確な課題解決の取組を応援できる人材の発掘・育成」の4つが確認された。



2 グループ

1990年以前は「行政がまちづくりをしてくれた時代」。90年代から高津区と宮前区での区づくり白書、市民健康の森の取組など、「市民が発意し行政と協働で社会的な課題に取り組む時代」になった。2000年代は開発による緑の保全や街の空間づくりへ市民意見が反映され、まちづくりへの参加意識を後押しした。一方課題が多様化し、より多くの世代、多くの課題への対応や、中間支援も求められるようになった。このため各区まちづくり推進組織は、互いの活動を学び合う交流会を自主的に行った。2010年代は、市民がネットワークやスキルを生かして連携し身近な課題に取り組んだ。再開発によるまちの変化が起き、空間の試験活用や新しい住民によるコミュニティづくりが行われるようになった。今後は、行政に頼らず個別に活動をするグループなど取組が多様化する中、市民の奉仕精神に頼るだけでなく、多世代が継続的に自分のまちづくりに関わることを支えられるしくみ（専門のコーディネート機能や参加制度など）が必要だと感じる。

1990年以前

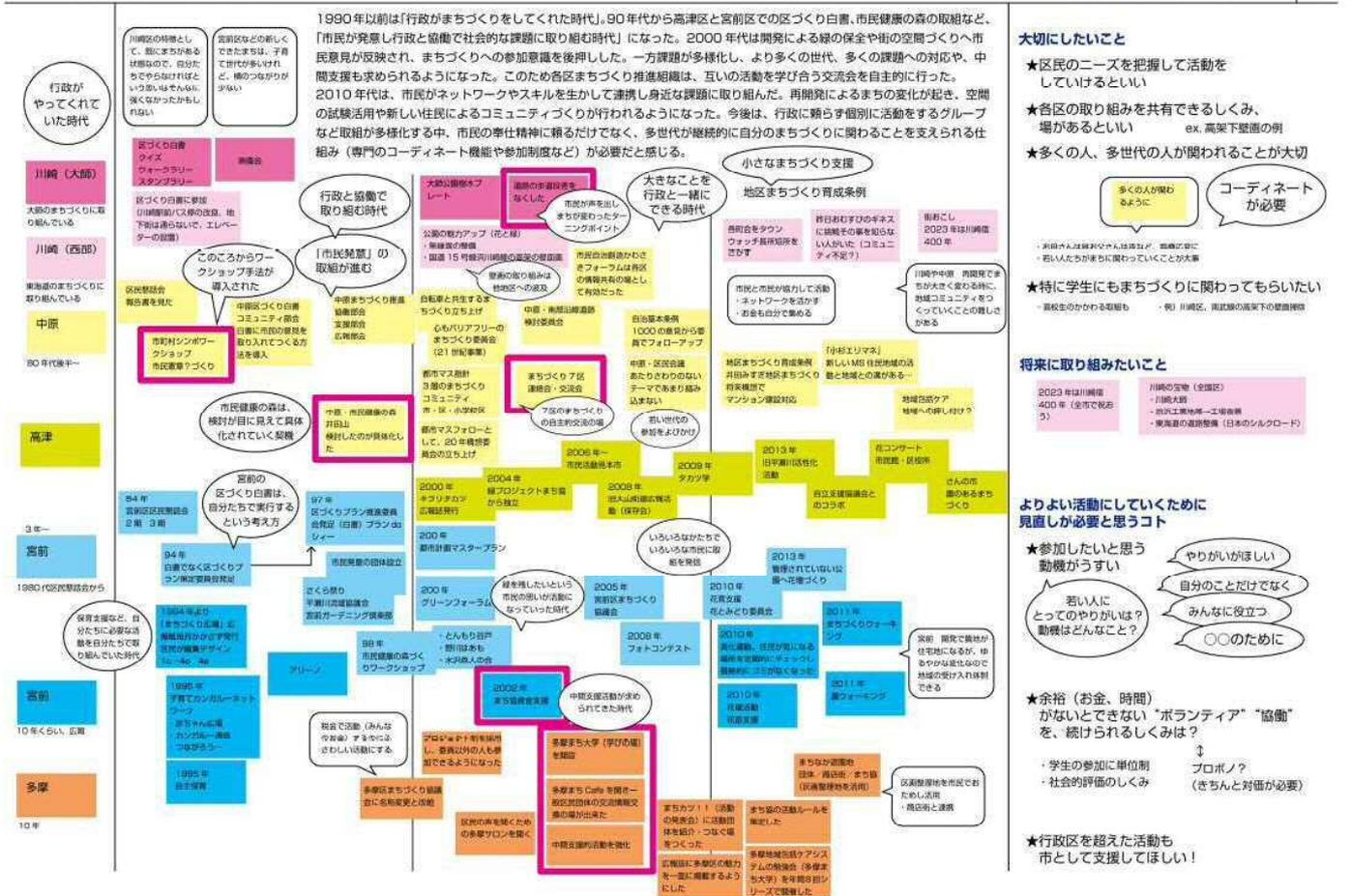
1990年代

2000年代

2010年代

ミライの川崎コミュニティ施策

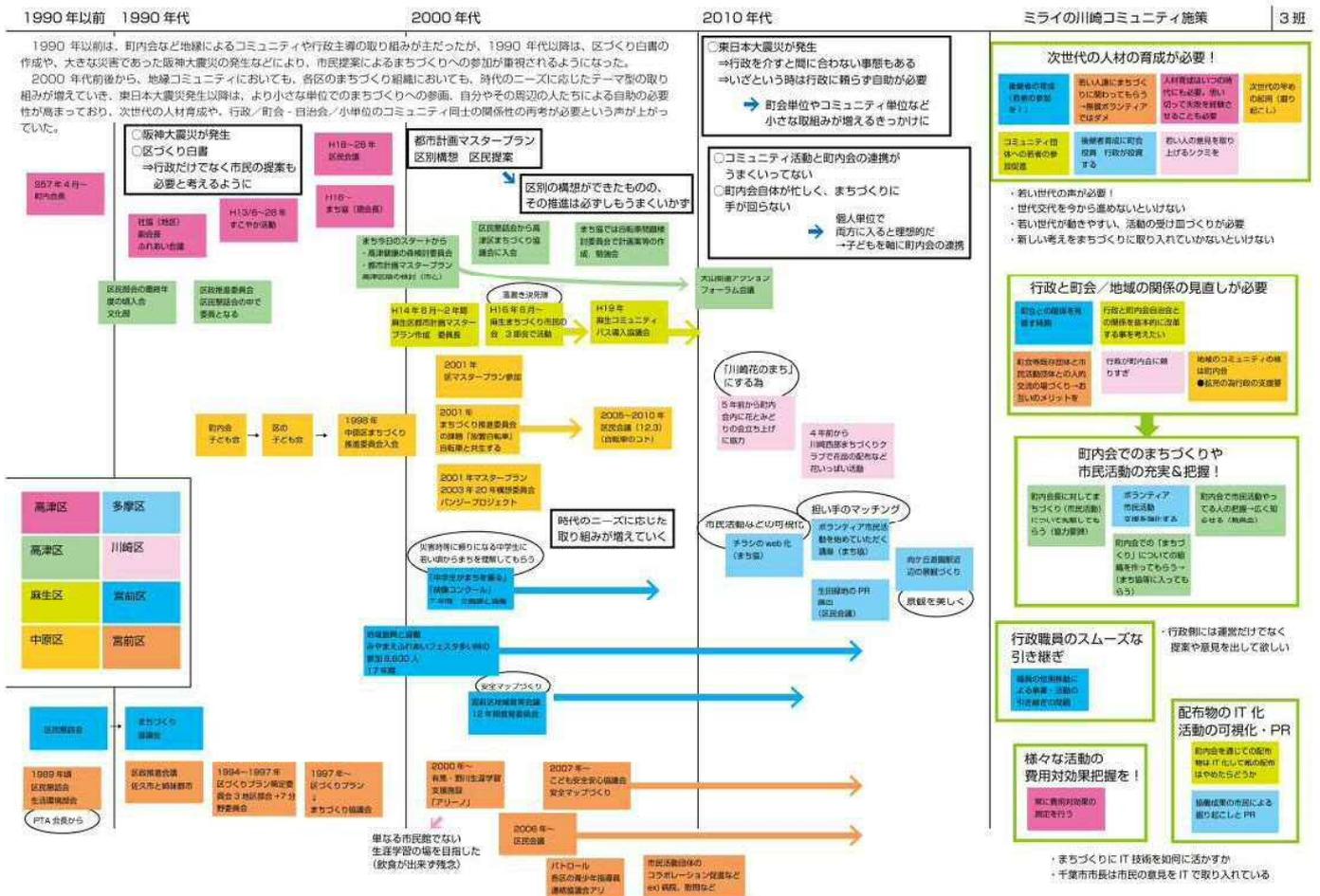
2班



3 グループ

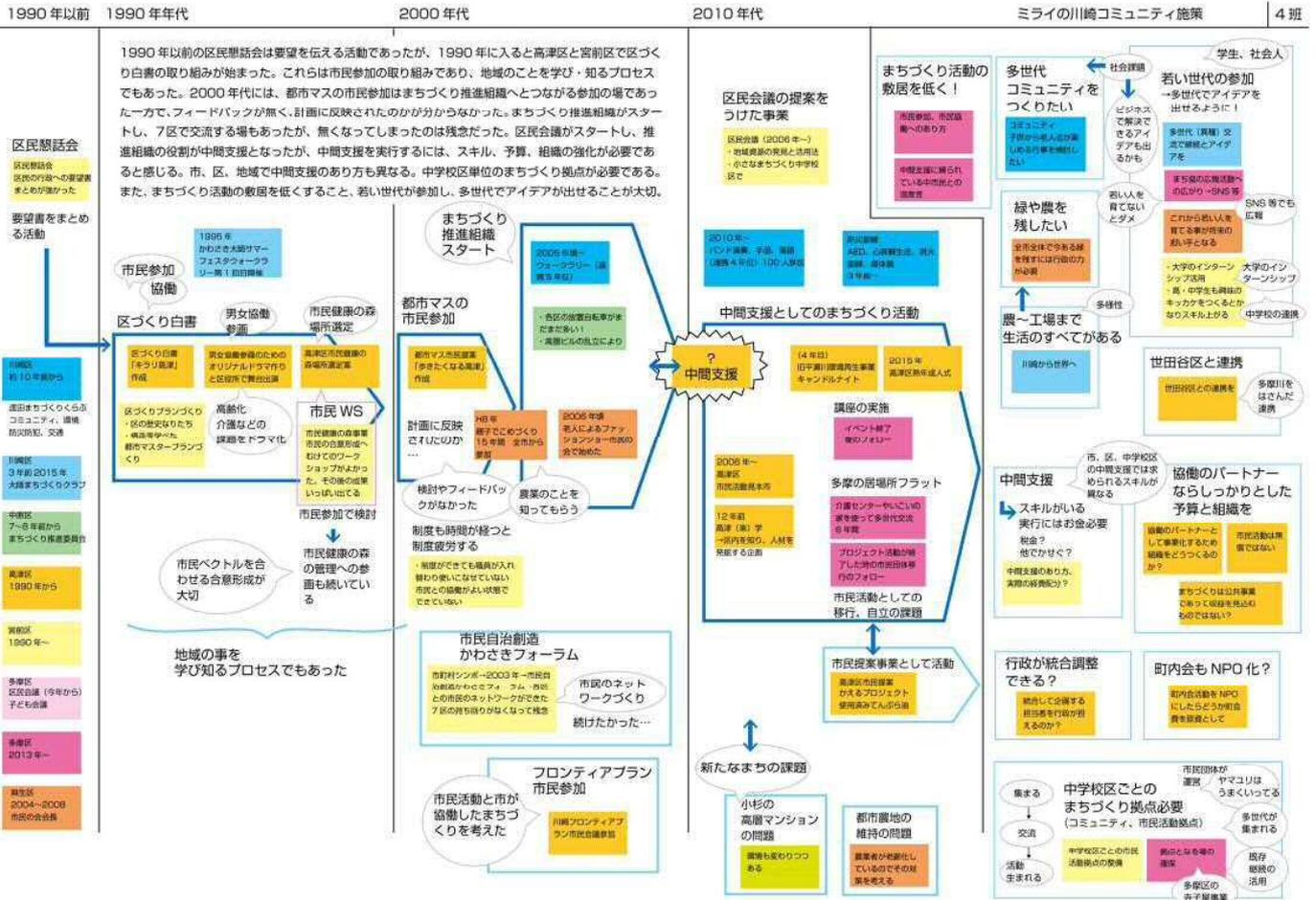
1990年以前は、町内会など地縁によるコミュニティや行政主導の取り組みが主だったが、1990年代以降は、区づくり白書の作成や、大きな災害であった阪神大震災の発生などにより、市民提案によるまちづくりへの参加が重視されるようになった。

2000年代前後から、地縁コミュニティにおいても、各区のまちづくり組織においても、時代のニーズに応じたテーマ型の取り組みが増えていき、東日本大震災発生以降は、より小さな単位でのまちづくりへの参画、自分やその周辺の人たちによる自助の必要性が高まっており、次世代の人材育成や、行政／町会・自治会／小単位のコミュニティ同士の関係性の再考が必要という声が上がっていた。



4 グループ

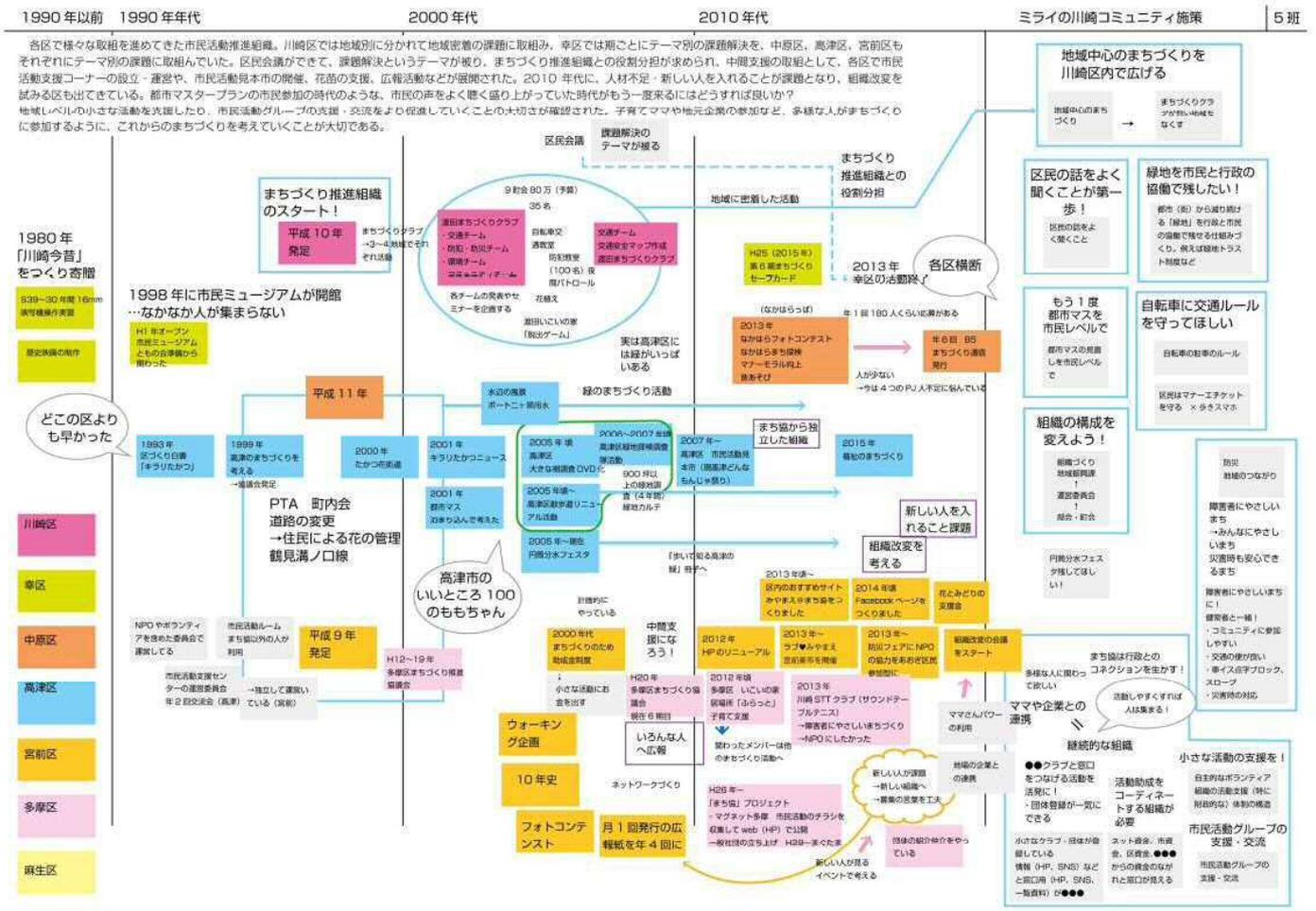
1990年以前の区民懇話会は要望を伝える活動であったが、1990年に入ると高津区と宮前区で区づくり白書の取り組みが始まった。これらは市民参加の取り組みであり、地域のことを学び・知るプロセスでもあった。2000年代には、都市マスの市民参加はまちづくり推進組織へつながる参加の場であった一方で、フィードバックが無く、計画に反映されたのかが分らなかった。まちづくり推進組織がスタートし、7区で交流する場もあったが、無くなってしまったのは残念だった。区民会議がスタートし、推進組織の役割が中間支援となったが、中間支援を実行するには、スキル、予算、組織の強化が必要であると感じる。市、区、地域で中間支援のあり方も異なる。中学校区単位のまちづくり拠点が必要である。また、まちづくり活動の敷居を低くすること、若い世代が参加し、多世代でアイデアが出せることが大切。



5 グループ

各区で様々な取組を進めてきた市民活動推進組織。川崎区では地域別に分かれて地域密着の課題に取り組む、幸区では期ごとにテーマ別の課題解決を、その他の区もそれぞれにテーマ別の課題に取り組んでいた。区民会議ができて、課題解決というテーマが被り、まちづくり推進組織との役割分担が求められ、中間支援の取組として、各区で市民活動支援コーナーの設立・運営や、市民活動見本市の開催、花苗の支援、広報活動などが展開された。2010年代に、人材不足・新しい人を入れることが課題となり、組織改変を試みる区も出てきている。都市マスタープランの市民参加の時代のような、市民の声をよく聴く盛り上がっていた時代がもう一度来るにはどうすれば良いか？

地域レベルの小さな活動を支援したり、市民活動グループの支援・交流をより促進していくことの大切さが確認された。子育てママや地元企業の参加など、多様な人がまちづくりに参加するように、これからのまちづくりを考えていくことが大切である。

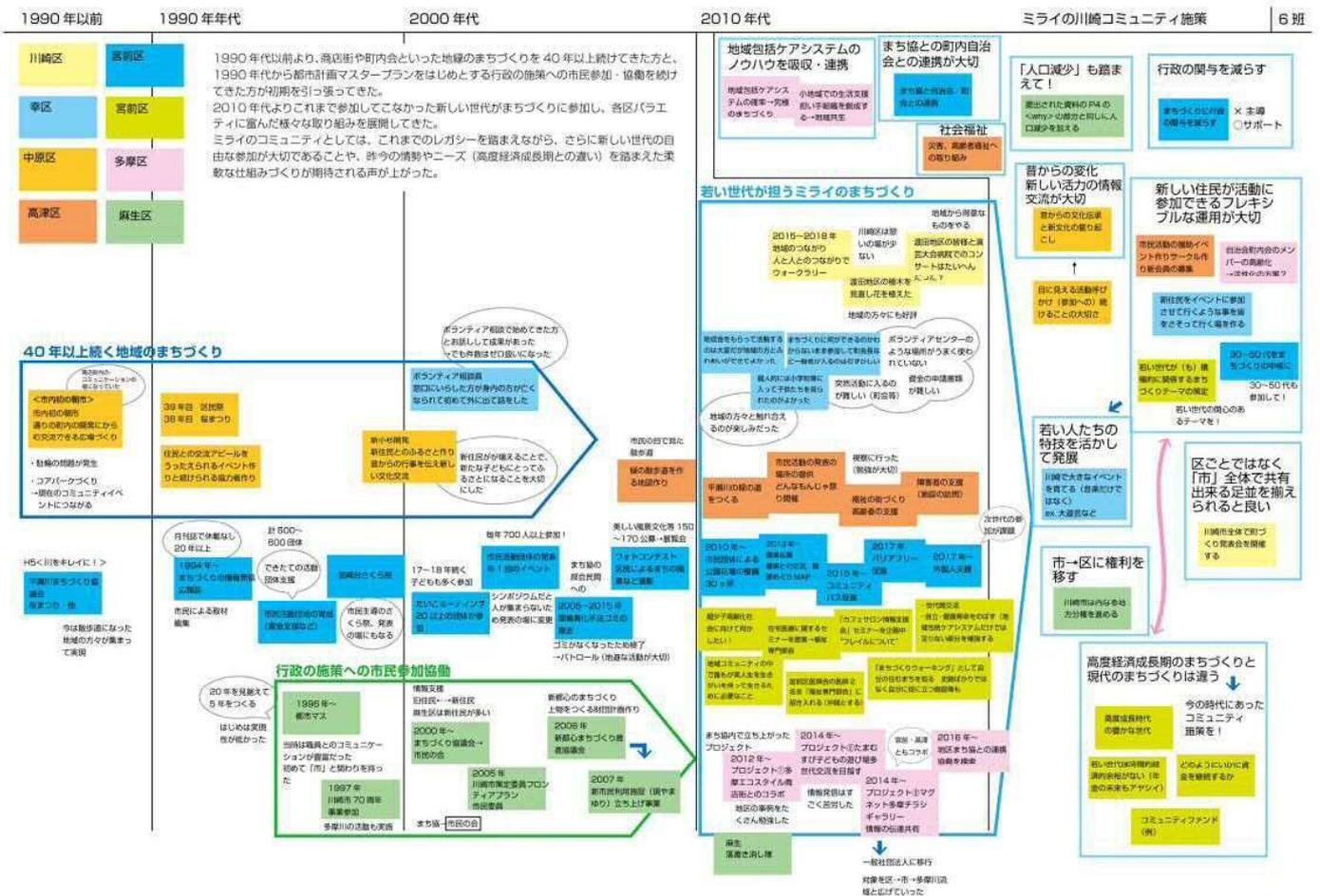


6 グループ

1990年代以前より、商店街や町内会といった地縁のまちづくりを40年以上続けてきた方と、1990年代から都市計画マスタープランをはじめとする行政の施策への市民参加・協働を続けてきた方が初期を引っ張ってきた。

2010年代よりこれまで参加してこなかった新しい世代がまちづくりに参加し、各区バラエティに富んだ様々な取り組みを展開してきた。

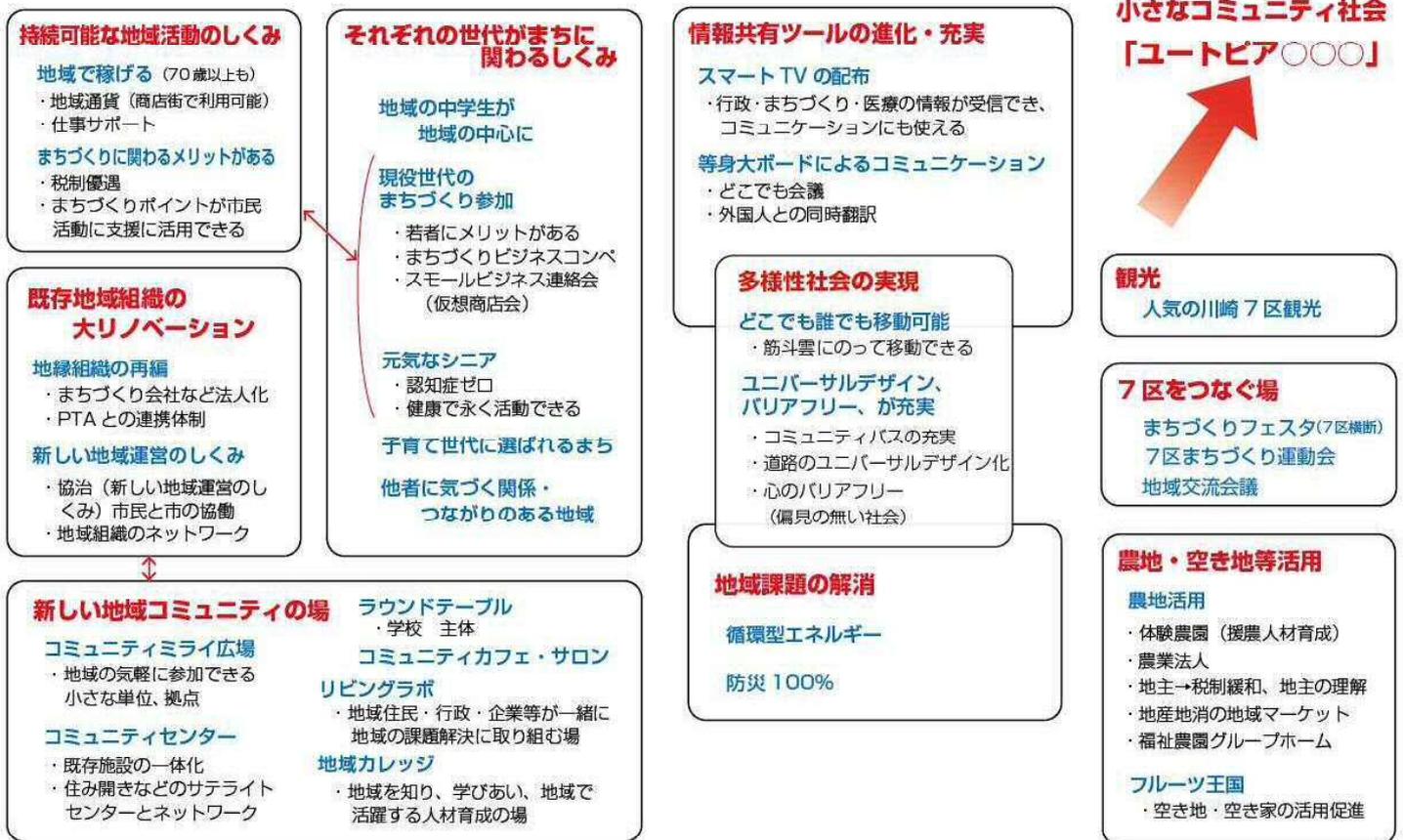
ミライのコミュニティとしては、これまでのレガシーを踏まえながら、さらに新しい世代の自由な参加が大切であることや、昨今の情勢やニーズ（高度経済成長期との違い）を踏まえた柔軟なしくみづくりが期待される声が上がった。



(ワークショップの様子)



第2回ワークショップのポイント



1 グループ

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっているのか？	②こうなるために誰のどんな取組が必要か？どんな機能・しくみが必要か？
ユートピア〇〇〇	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティ、地域参加、移動、防災など多様な地域課題を解決するために、多様な担い手が広場を拠点に活動を展開している ・ユートピア〇〇〇の運営は「コミュニティミライ広場」が行っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい地域運営のしくみが不可欠である <p>イメージ</p>
コミュニティミライ広場	<ul style="list-style-type: none"> ・世代交代した市民団体、体制が変革された町内会、などの既存組織のほか、子育て世代、働き世代など、これまで地域との関わりが薄かった方も、活動内容、時間帯、関わり方の深さなど、その人にあった形で気軽に参加できる 	
リアル・ネット」ミライ統合	(今もすでに技術はある)	(実用化、普及)
<p>このツールは 20年後は、当然実用化されている！！</p>		

暮らしの理想郷

「ユートピア〇〇〇」誕生！

小さなコミュニティ社会「ユートピア〇〇〇」が誕生した。コミュニティミライ広場が運営を担っている。循環型エネルギーを活用し、緑、水辺が豊か。地産地消の地域マーケットが開かれ買い物も便利。どこでもだれでも移動可能で、災害対策も100%整っている。

20年前には、地域の課題とされていたことがすべて解決され、誰もが自分らしく行動できて、豊かな人生を送ることができる、まさに理想郷だ。



小さなコミュニティ「コミュニティミライ広場」が市内50カ所に！

顔の見える小さな地域単位で、コミュニティを育む「コミュニティミライ広場」の設立が各地で相次いでいる。

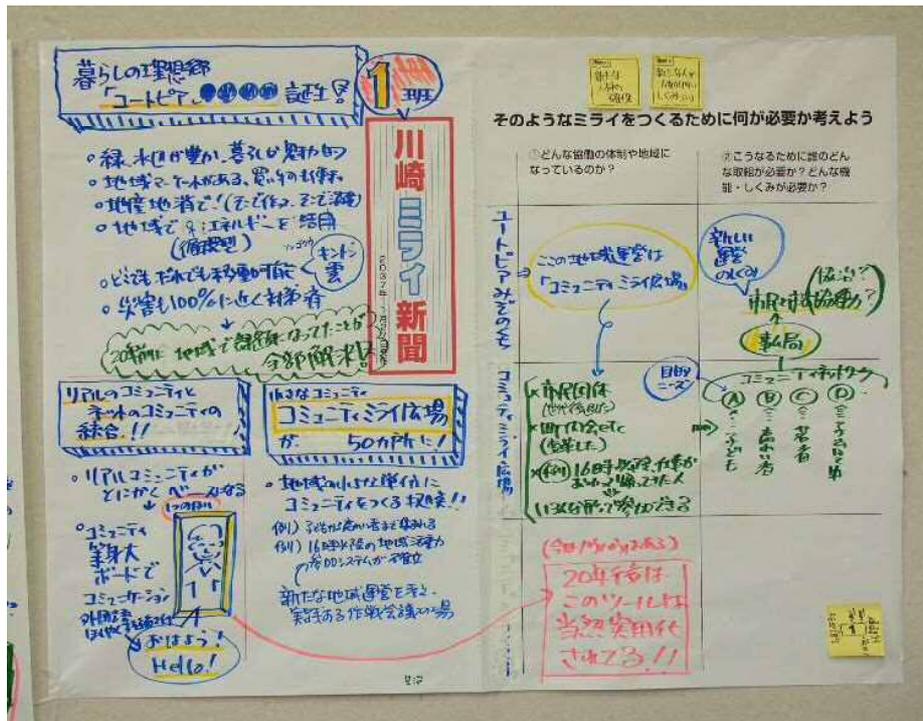
子どもから高齢者まで誰もがいつでも立ち寄りやすいほか、働き世代も地域活動に気軽に参加できるしくみを運営するなど、新たな地域運営を考え、実践する作戦会議の場ともなっている。

リアルなコミュニティとネットのコミュニティがついに統合！！

インターネット技術を活用し、自宅にいても、様々な人とリアルな交流ができるしくみが開発された。翻訳機能付きで世界中の人と会話が可能である。

＜一例＞
画面を通して会話可能なコミュニティガード

おはよう！ Hello!



2グループ

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっっているのか？	②こうなるために誰のどんな取組が必要か？どんな機能・しくみが必要か？
「かわ」発行一兆！	<ul style="list-style-type: none"> 「かわ」を運営・発行する民間事務局がある（税金がかからない） 地域の活動団体、町会自治会、商店が参加してかわを活用している →いろいろな活動・もの・ことに活用できる 	<ul style="list-style-type: none"> 参加は年齢や性別、国籍関係なくみんなが参加できる お金には変えられないので地域でどんどん回るしくみが必要 対価のルール（内容と交換数量の目安など）がある
川崎フルーツ王国	<ul style="list-style-type: none"> 農産物を育てるために、農家の技術を提供してもらう 空き地や空き家の活用によりコミュニティ活動が活性化される 	<ul style="list-style-type: none"> 使われていない空き家を活用しやすい条例がある 「かわ」でボランティア活動が促進される
川崎7区観光	<ul style="list-style-type: none"> 7区の魅力・資源が市民みんなに共有されている 「地域自慢」が盛んになり7区つながりが強くなる まちの魅力・資源が市外に発信され観光産業につながる 	<ul style="list-style-type: none"> 7区の魅力・資源を発掘・共有・活用する取組 それぞれの観光協会、観光ガイドが連携した取組

6

全市共通地域通貨「かわ」発行 1兆かわを突破！！

市内の全商店街でも利用可能に

ご近所や町会・自治会など、誰かの役に立ちながら地域通貨を介して心豊かに暮らす…、そんな長寿・多様化時代のライフスタイルの浸透を後押しするのが地域通貨「かわ」だ。この秋からは「かわ」が全商店街で利用可能になり、年齢や世代を超えて「やりたい」「楽しい」と人気の活動がさらにまちを盛り上げている。子どもたちの参加も活発だ。この取組へ他都市も注目している。



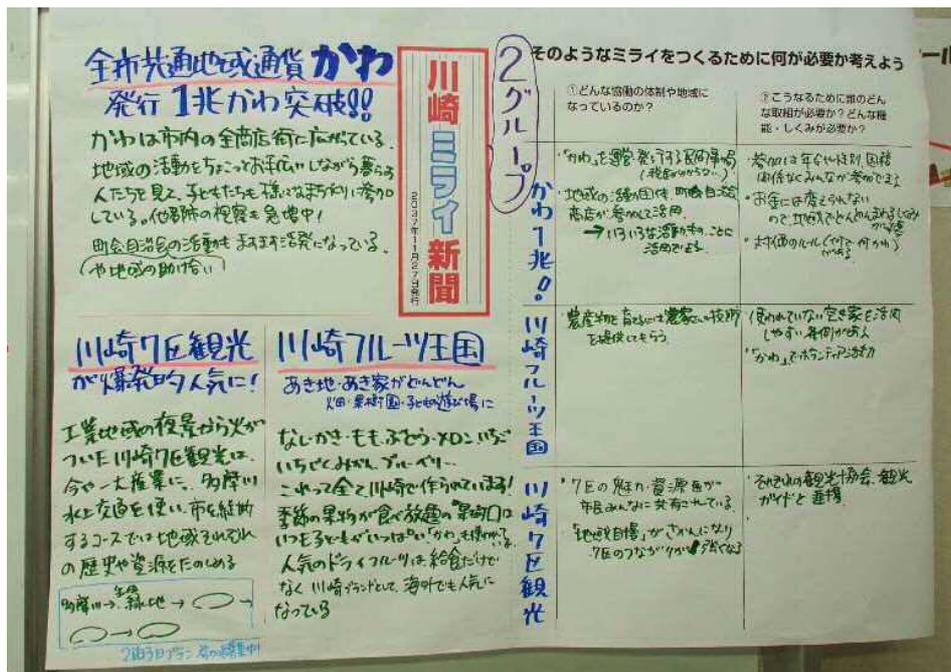
川崎フルーツ王国

空き地がどんどん畑・果樹園、子どもの遊び場に

なし・かき・もも・ぶどう・メロン・いちご・いちじく・みかん・ブルーベリー、これら全てが川崎産のフルーツだ。市では空き地・空き家をコミュニティ活動に積極活用しており、地域が管理する畑や果樹園は、子どもたちの遊び場にも、季節の恵みの楽園にもなっている。これらの管理仕事や作物の購入には地域通貨「かわ」が使われている。収穫物を生かした地域ビジネスも盛んで、ドライフルーツは給食だけでなく、川崎ブランドとして海外でも人気を集めている。

川崎7区観光が爆発的人气に！

7区の歴史や魅力を生かし、市民はもちろん市外にも発信することで成長してきた川崎7区観光の取組は、工業地域の夜景から火がつき、今や一大産業に成長した。多摩川水上交通を使い縦断するコースでは地域それぞれの資源を楽しめる。ツアー参加をきっかけに川崎市へ移住する例も増えている。



3 グループ

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっているのか？	②こうなるために誰のどんな取組が必要か？どんな機能・しくみが必要か？
誰でも地域で月収20万！	<ul style="list-style-type: none"> ・助け合いの社会がまだまだ構築されていない →例えば町会・自治会が機能すると良い 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事ができる人と助けを求めている人のマッチングの仕組みが必要 →スマホなどIT技術を活用 ・多摩区の地域通貨「たま」を見本に、地域通貨をまずはお試しで実行してみる。行政・銀行も頑張る！ ・地域で仕事を担い易いよう「地域限定」で資格の規制を緩和！ ex) 小学校用務員資格
中学生が地域の主役	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の中に、特に日中、頼りになる男手などが不足している。 ・中学生が地域と関わり知る機会が少ない ・高津区では中学生が消防隊実習をやっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生が常に町会などに顔を出し地域を学び訓練する機会を ・実地訓練として、ホースの付け方やテントの立て方を学ぶ ・防災について授業を実施 ex) 仙台には高校で防災科学科がある！
町会・自治会再編成	<ul style="list-style-type: none"> ・現在は役員の担い手がいない →文句は言われても褒められない →金銭的に労力に見合わない ・現在の閉塞感 →新しい人が入ってこない →解任の制度がない 	<ul style="list-style-type: none"> ・人材が何よりも重要。将来的に役員にしたい人をピックアップして、その人にとっても為になる、地域活動に関する研修を行う ・人材育成の場を行政が積極的に設けると良い ・役員を有料にする ex) 大阪和泉区では、行政から年間300円出る

8

地域の中で誰でも月収入20万円以上達成！

70才以上も、1人親世帯も、子育て中のお母さんも。地域の貧困家庭もゼロへ！

地域で必要な様々な仕事・サポートをすると、川崎市内の商店や、困りごと支援で使える地域通貨「かわさき」がもらえる！あらゆる地域の仕事がメニュー化され、1時間単位の仕事がなんと200種類以上も！貯金もホクホク！子育て中のお母さんや、高齢の方も地域で大活躍！



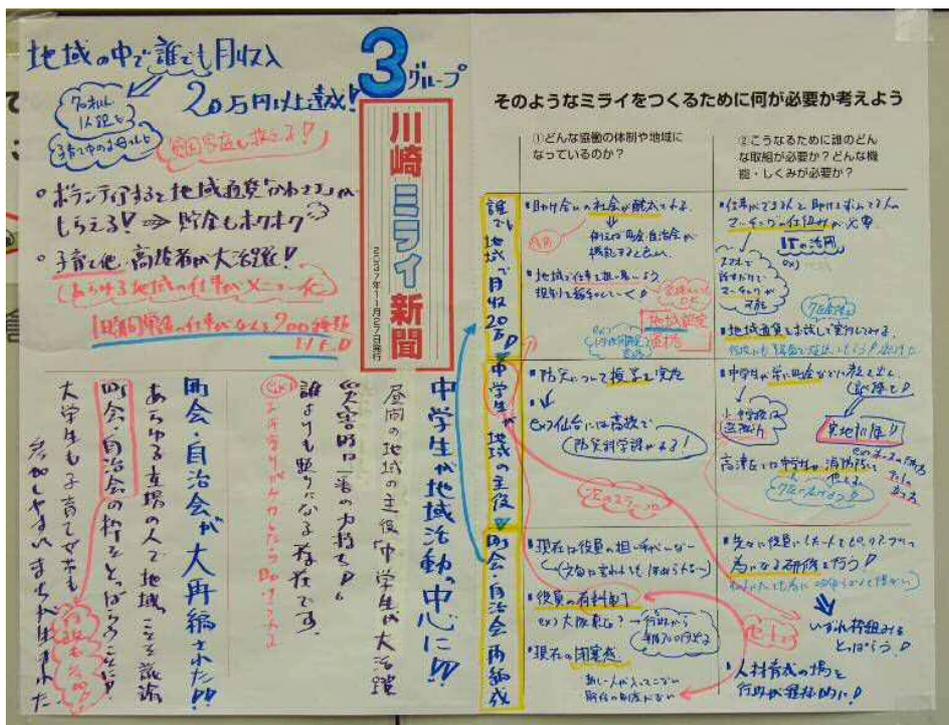
中学生が地域活動の中心に！

働き盛りの世代は職場へ、高校生や大学生は通学で外へ出て行く日中、地域の中で一番体力のある「昼間の主役」中学生が地域活動で大活躍！
特に災害時は、地域の中で一番の力持ちとして、ケガをしたお年寄りをおぶって救出するなど、誰よりも頼れる存在として信頼されています。

町会・自治会が大再編された！

産・官・学・民、あらゆる立場の人が一堂に会し、地域のこれからについて議論したところ、町会・自治会の枠を撤廃＆大再編！新しい地域の枠組みが誕生することになりました。
大学生も子育て世帯も参加しやすい、新しい地域のつながりが合いが、まさに生まれています。

9



4 グループ

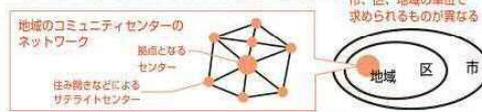
そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっているのか？	②こうなるために誰のどんな取組が必要か？どんな機能・しくみが必要か？
コミュニティセンター	<ul style="list-style-type: none"> 既存の施設を活用した地域拠点ができ、多世代交流につながっている 	<ul style="list-style-type: none"> 子育て支援センターと老人いこいの家を一本化 町会会館も有効活用 運営資金をどうする？ <ul style="list-style-type: none"> ①企業の参画の検討 ②施設の本化による効率化 特定の活動への寄付の受け入れ（損金算入などの税制の優遇）
地域のリビングラボ	<ul style="list-style-type: none"> 体験から地域の風土を知ったり、参加者同士が学び合える場ができています 地域住民、行政、企業等と一緒に地域の課題解決に取り組むリビングラボができています 	<ul style="list-style-type: none"> 市民アカデミーの取り組みを振り返り、課題を整理する 新しい学びの場であることをPR コーディネーターが必要 市民が力をつけるために議論を深めてベクトルを合わせが必要 行政の担当者の異動で想いが断絶しない仕組みをつくる
農地活用	<ul style="list-style-type: none"> 農地活用の大切さを伝え、親子で体験できる農園などの農地活用が展開されている 	<ul style="list-style-type: none"> 地主さんの理解が必要 相続などの税制の課題を解決 都市農地の活用のための農業法人をつくる 体験農園で人を育てて活躍してもらう
		<ul style="list-style-type: none"> 上記全てに共通して、行政施策につながる事が大切

10

コンシェルジュがいて、心地よい場所 コミュニティセンターができた！

既存の子育て・高齢者施設などを一体化してコミュニティセンターができた！小学校区（又は中学校区）に一つのセンターが設けられ、住み開きなどのサテライトセンターとネットワーク。心地よく、集まりたくなる場所だ。



川崎ミライ新聞 4版
2017年11月27日発行

地域に開かれた農地の活用で、地域が魅力的に！

農は、経済としての農業だけでなく、環境・緑・レクリエーション・教育・防災などの多様な機能を担っている。

そんな農地が地域に開かれ、地域が担い手になる取り組みが地権者と地域の連携で進み、地域の魅力的になっている。資源の循環も進んでいる。里山にも手が入るようになっていく。

まちづくりを学ぶ地域カレッジ
一緒につくり出すリビングラボ

コミュニティセンターでは、体験から地域の風土を知ったり、参加者同士が学び合える地域のカレッジや、地域住民、行政、企業等と一緒に地域の課題解決に取り組むリビングラボに取り組んでいる。

地域を知る
学び合う
地域で活躍する

11

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっているのか？	②こうなるために誰のどんな取組が必要か？どんな機能・しくみが必要か？
コミュニティセンター	<ul style="list-style-type: none"> 既存の施設を活用した地域拠点ができ、多世代交流につながっている 	<ul style="list-style-type: none"> 子育て支援センターと老人いこいの家を一本化 町会会館も有効活用 運営資金をどうする？ <ul style="list-style-type: none"> ①企業の参画の検討 ②施設の本化による効率化 特定の活動への寄付の受け入れ（損金算入などの税制の優遇）
地域のリビングラボ	<ul style="list-style-type: none"> 体験から地域の風土を知ったり、参加者同士が学び合える場ができています 地域住民、行政、企業等と一緒に地域の課題解決に取り組むリビングラボができています 	<ul style="list-style-type: none"> 市民アカデミーの取り組みを振り返り、課題を整理する 新しい学びの場であることをPR コーディネーターが必要 市民が力をつけるために議論を深めてベクトルを合わせが必要 行政の担当者の異動で想いが断絶しない仕組みをつくる
農地活用	<ul style="list-style-type: none"> 農地活用の大切さを伝え、親子で体験できる農園などの農地活用が展開されている 	<ul style="list-style-type: none"> 地主さんの理解が必要 相続などの税制の課題を解決 都市農地の活用のための農業法人をつくる 体験農園で人を育てて活躍してもらう
		<ul style="list-style-type: none"> 上記全てに共通して、行政施策につながる事が大切

5 グループ

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっているのか？	②こうなるために誰のどんな取組が必要か？どんな機能・しくみが必要か？
川崎市 まちづくりフェスタ	7区連絡会 ・7区で連絡会をつくる ・活動サポーターが必要 ・7区運動会実行委員会を作る	・7区全体のコミュニティバス運用ルートをつくる ・青少年の宿泊施設を増やしてほしい→競技に出る人が泊まる(ジュニアリーダー育成で泊まれる場所がない) ・ハンデに関係なく参加できるスポーツルールをつくる ・まち協がハンデをもつ人との窓口もつとめる体制がある
まち協が市民意見を 集約して コミュニティ施策を作成	・7区で連絡の窓口をつくる ・市民意見を集約する体制をつくる→都市マスの見直しをやる→市民が盛り上がる	・市民意見を吸い上げる窓口をつくる ・コミュニケーション↑ツールで意見を吸い上げる
各家庭にスマート テレビを配布	・今は各家庭に伝達する情報がバラバラ ・まちづくり情報などを集約して発信できる体制	・スマートテレビを各家庭に配布！ ・まちづくり情報もやりとりできる ・医療のやりとりできる ・日本のコミュニケーション技術も発達する
川崎市内共通の まちづくりポイント 利用開始	・各地域でポイントがバラバラ	・ポイント会社、クレジットカード会社と連携してポイント制度をつくる ・ポイントを集めるために市民活動が活発になる ・川崎市内の色々なところで使える！ ・外部委託できるところは外部委託に ・運用は市民に有償委託する ・10代若者は2倍ポイントもらえる80代シニアは割引・割増される

12

第19回 「川崎市まちづくりフェスタ」開催！！

7区それぞれに企画を持ち寄り、市民健康の森でフェスタを開催した。ハンデを持つ人が不自由なく会場に来られるよう、各区で運用中のコミュニティバスが活用された。道路のユニバーサルデザイン化は順調に進んでいて、来年には利用を開始できる予定となっている。また、フェスタでは市民活動を支援するまちづくり協議会の活動が広報された。同時に7区まちづくり運動会を開催し、ハンデのあるなしに関わらず競技を楽しんだ。

まち協が市民意見を集約して川崎市のコミュニティ施策を作成！ 第7面へ！

社会状況 環境変化 解決！！

川崎市内共通でまちづくりポイントの利用が開始！！
川崎市内全域で使える地域通貨として、新しくまちづくりポイントの利用が開始された。行政書類の所得、商店街での買い物、バス(深夜も)電車、シェア自転車などに利用できるようになり、若者のまちづくりへの参加が増えつつある。若者はポイントの加算が通常の2倍となり、シニアには利用時の割引が適用される。

各家庭にスマートテレビ無料配布！！
誰でも簡単に行政・まちづくり・医療などの情報を受け取り、コミュニケーションにも活用できるスマートテレビが配布された。これにより、まちづくり協議会等地域活動の会議にも、テレビ電話が導入され始めている。

技術 社会状況 解決！！

13

2017年11月27日発行
川崎ミライ新聞5班

第19回「川崎まちづくりフェスタ」開催！！

5グループ

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

川崎ミライ新聞

2017年11月27日発行

7区それぞれに企画を持ち寄り、市民健康の森でフェスタを開催した。ハンデを持つ人が不自由なく会場に来られるよう、コミュニティバスが活用された。道路の整備は現在進めているところ、市民健康の森も進めているまちづくり協議会の広報が行われた。同時にまちづくり運動会を開催し、ハンデのあるなしに関わらず競技を楽しんだ。

まち協が市民意見を集約して川崎市のコミュニティ施策を作成！

社会状況 環境変化 解決！！

各家庭にスマートテレビ無料配布！！

誰でも簡単に行政・まちづくり・医療などの情報を受け取り、コミュニケーションにも活用できるスマートテレビが配布された。これにより、まちづくり協議会等地域活動の会議にも、テレビ電話が導入され始めている。

川崎市内共通でまちづくりポイントの利用が開始！！

川崎市内全域で使える地域通貨として、新しくまちづくりポイントの利用が開始された。行政書類の所得、商店街での買い物、バス(深夜も)電車、シェア自転車などに利用できるようになり、若者のまちづくりへの参加が増えつつある。若者はポイントの加算が通常の2倍となり、シニアには利用時の割引が適用される。

6 グループ

そのようなミライをつくるために何が必要か考えよう

	①どんな協働の体制や地域になっっているのか?	②こうなるために誰のどんな取組が必要か?どんな機能・しくみが必要か?
A 公園・空地 町会・自治会 パワーアップ	<ul style="list-style-type: none"> 多様な主体のラウンドテーブルづくり 地域交流会議の実施 小杉地域は実行してます (マンション役員、行政、企業、町会、商店街、学校長、PTAの定期会議) 設備の充実 <ul style="list-style-type: none"> 遊具の拡大・トイレの拡充・スポーツ用具・施設の拡大 	<ul style="list-style-type: none"> 発信は市政だより及びまちづくり新聞をつくる 7区の会議を定例化する、そこで町づくりだより 町内会新聞発行、パソコンに立ち上げ 活動拠点場所 (常日頃からのコミュニケーション) <ul style="list-style-type: none"> →拠点は常に開かれた場所が必要 行政の担当部署の協働 行政・町内会の協働 <ul style="list-style-type: none"> →行政内の協働、行政⇄町会の協働
B ふ・く・し	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティカフェ/サロン <ul style="list-style-type: none"> →毎日オープンしている自由に行けるコミュニティサロン 脳、身体を使って交流する場 (多世代) 語る、一緒に食べる、脳と身体をたくさん使う場、交流 環境 <ul style="list-style-type: none"> ・他者に気づく関係を持つ。地域のつながり 	<ul style="list-style-type: none"> シニアが担い手になる <ul style="list-style-type: none"> ・シニアが担い手になる→多世代交流 7区の合同イベントも実施する <ul style="list-style-type: none"> ・7区の合同イベントを開催するコミュニティ大会 福祉農園グループホーム <ul style="list-style-type: none"> ・福祉型農園。グループホーム多世代で畑づくり
C 子世代 No.1	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの「食」ex) ども食堂の発展形の必要 町内会・自治会による「まちづくり会社」の運営/助け合い <ul style="list-style-type: none"> →町内会によるまちづくり会社の設立→法人化 PTA⇄町内会 <ul style="list-style-type: none"> ・PTAと町内会・自治会との連携 	<ul style="list-style-type: none"> 仮想の商店会を作る <ul style="list-style-type: none"> ・スモールビジネス連絡会 (バーチャル商店会) まちづくりビジネスコンペ アイデア+実績 <ul style="list-style-type: none"> ・若い世代向けまちづくりビジネスコンテスト (賞金あり)

14

公園・公開空地が自由に誰でも使えるように！ 町内会・自治会がパワーアップして コミュニティの要に！

- 公園や公開空地でたくさんのコミュニティ活動が活発に行われます。
- たくさんのイベントが展開、発表の場、交流の場、発信の場
- 町会活動が核になってテーマ型の課題解決を実現

つながりづくり
福祉・防災・防犯に活かす



公園での交流イベントの様子

2017年11月27日発行

川崎三ライ新聞 6版

ふつうに暮らしてしあわせを実現！

川崎市全体でバリアフリー化を実現！
誰でも歩いて外に出歩ける「心のバリアフリー」
偏見のない社会になる
認知症ゼロ！社会参加の時代へ
元氣なシニアが増加→社会参加につなげる。

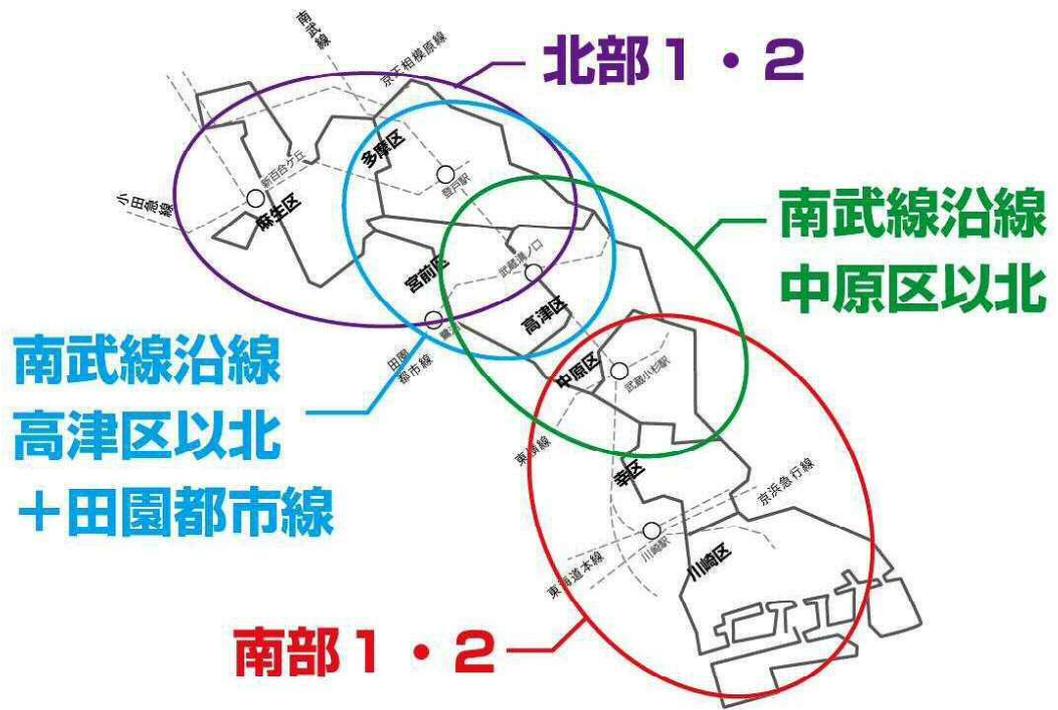
地域で子育てを丸抱えできる仕組みが実現！
女性の社会進出を応援！共働き世帯に優しい街
全国から「何かやってみたい」「若者が川崎に集中！
カワサキビジネス KAWASAKI BIZ 環境整った
現役世代のまちづくり参加者が急増！

子育て世帯が住みやすい街
No.1になりました

15



(エリア別のグループ分けについて)



(ワークショップの様子)



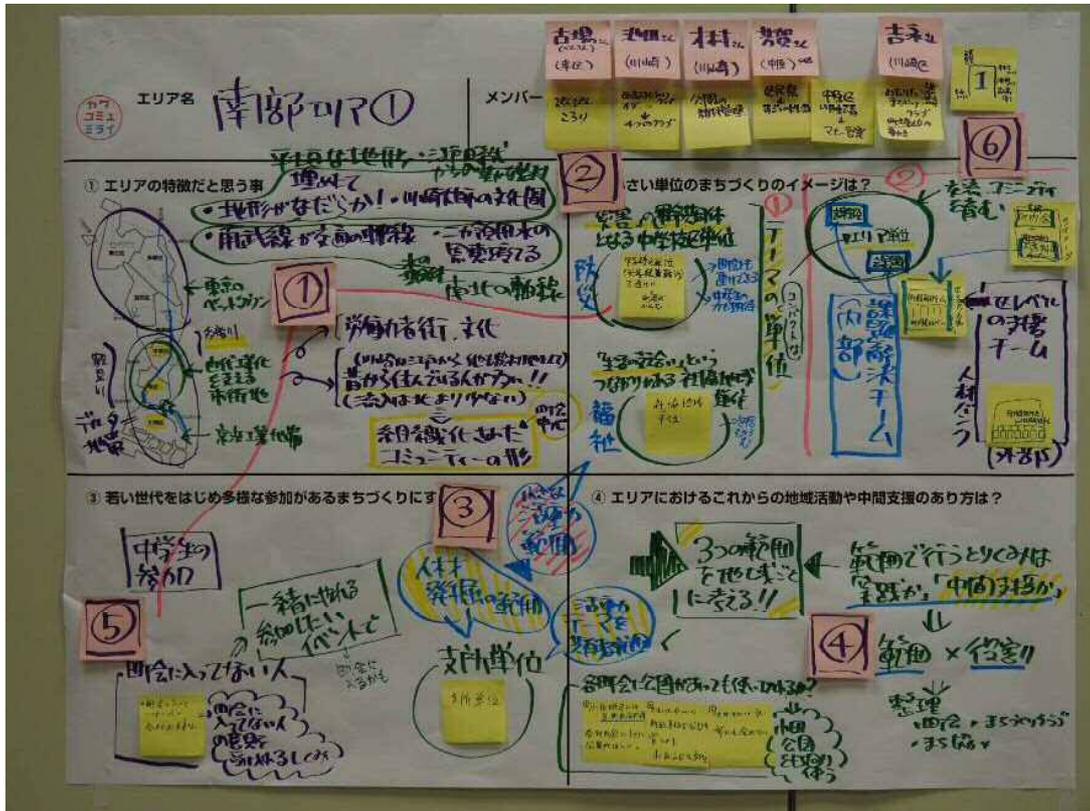


各グループワークのまとめ

「エリアごとのコミュニティ施策について意見を出し合おう」

1 グループ 南部 1

メンバー：古場さん、池田さん、木村さん、芳賀さん、吉永さん



■ ステップ1 「エリアの特徴だと思ふこと」

○地形がなだらかで平坦である

- ・平坦な地形
- ・多摩川と鶴見川に囲まれたデルタ地帯である

○川崎大師の文化圏である

○水辺の豊かな環境で水辺の共同体として生活文化が育まれた

- ・多摩川、鶴見川が生活に根付いている
- ・二カ領用水の恩恵を受けている

○工業地帯を支える人の生活の場として市街化し、昔から住んでいる人が多い

- ・海辺が京浜工業地帯となり、江戸時代からの農村部が工業地帯を支える生活の場として市街化された
- ・昔から住んでいる人が多く、他からの流入は、北部に比べて少ない
- ・かつては労働者街があった

○町会等組織化された地域コミュニティが根付いている

- ・コミュニティが組織化されている
- ・町会中心のコミュニティ形成がある

○南武線が南北をつなぐ軸線となっている

- ・南武線が南北をつなぐ軸線である

■ステップ2「小さい単位のまちづくりのイメージは？」

○「災害時の助け合い」で運命共同体となる中学校区単位が考えられる

- ・中学校区単位（災害避難所）で連携=町会がからむ
- ・中学生とも協力するとよい

○「生活の支え合い」というつながりがある地区社協単位が考えられる

- ・社協地域単位

○活動の「テーマ」に即した小さな単位がよい

- ・「災害時の助け合い」をテーマとした中学校区単位、「生活の支え合い」をテーマとした地区社協単位など、地域ごとにふさわしい単位を考えたい

○人材発掘や協力者を増やすためには、支所単位くらいが必要

- ・小さな単位で活動してきたが人材が不足する
- ・人材発掘を考えると支所単位くらいがよい

○地域全体の活動テーマや課題を地域全体で共有する大きな単位も必要

- ・小さな単位だけではなく、地域全体に共通するテーマや課題など共有したり、活動を分担・連携するなど、大きな単位も必要

○「小さな活動単位」「人材発掘の単位」「活動テーマを共有する単位」の3つの視点で、地域に特徴にあわせた単位設定ができるとよい

- ・地域ごとにふさわしい単位は違う
- ・「小さな活動単位」「人材発掘の単位」「活動テーマを共有する単位」の3つの視点でそれぞれの地域で適切な単位を設定するのがよい

■ステップ3「若い世代をはじめ多様な世代の参加があるまちづくりにするには？」

○町会に入っていない人が地域に関われる方法を考えることが大切

- ・町会に入っていない人。参加ができない

○町会に入っていない人の意見を受け入れるしくみを考えることが大切

- ・町会に入っていない人の意見を受け入れるしくみ

○中学校区単位で活動すれば、中学生の参加が期待できる

○所属に関係なく一緒に企画する・参加できるイベントを最初の一步にする

- ・町会に入っていない人でも参加できるイベントが一番の入り口

- ・一緒にイベントを企画するとよい
- ・イベントを通じて町会に入ってくれる可能性もある

■ステップ4 「エリアにおけるこれからの地域活動や中間支援のあり方は？」

○地域のエリアを対象にコミュニティを育むチームと課題解決に取り組む地元チームの2層構成にするとよい

- ・町会は、地域のエリアを対象にコミュニティを育むチームであり、課題解決の取組には限界がある
- ・課題解決に取り組む地元チームは、別につくるとよい

○課題解決に取り組む地元チームの活動を支援する区レベルの支援チーム（人材バンク的）があるとよい

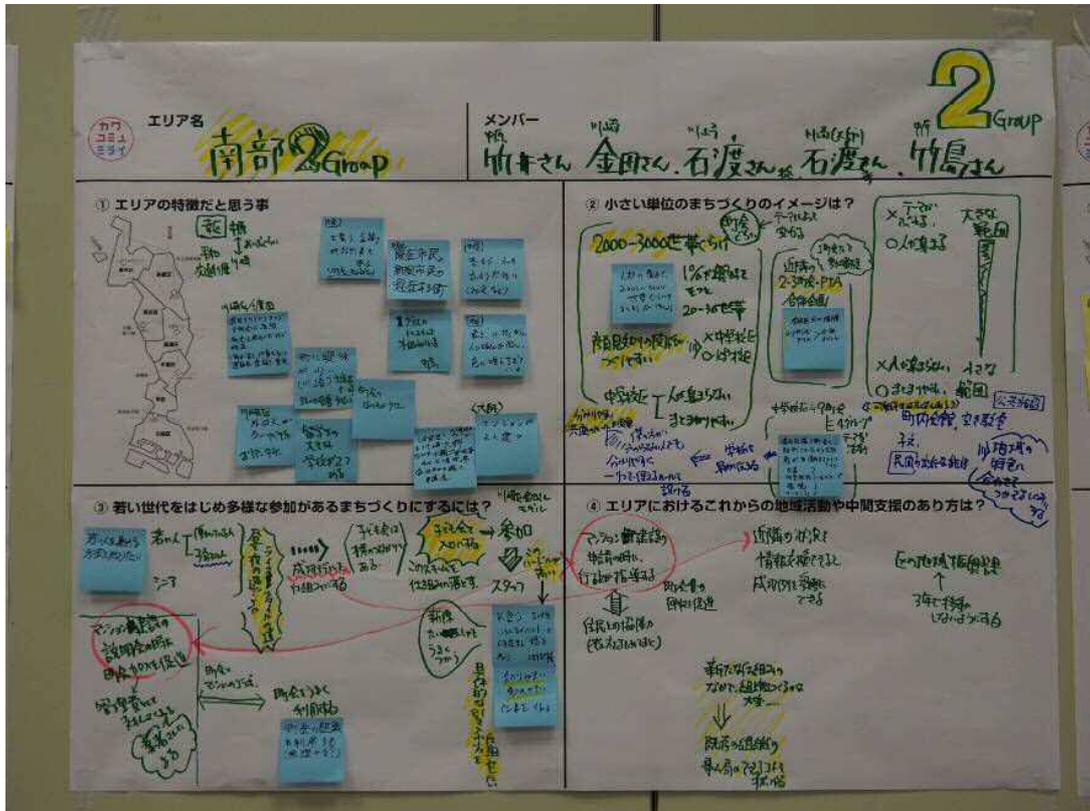
- ・課題解決に取り組む地元チームでは、全ての解決は難しい
- ・地元チームの取組みを支援する区レベルの支援チームがあるとよい
- ・区レベルの支援チームは、人材バンク的なイメージである

○小田公園を8町内会の活動拠点とすればよい

- ・小田地区には8町内会がある。各町内会に1つずつ公園がほしいという声がある
- ・しかし、お金がないので整備は難しい
- ・町会単位で公園をつくるよりも、小田公園を交代で活用すればよい

2 グループ 南部 2

メンバー：竹井さん、金田さん、石渡さん（稔）、石渡さん（孝）、竹島さん



■ステップ1 「エリアの特徴だと思ふこと」

○お祭りや盆踊り、地域行事などが盛ん

- ・(中原) お祭り、盆踊り、地域行事もある(町会・自治会)
- ・町が古く行事も多い。運動会・盆踊り・祭礼

○マンションの建設が進み、新旧住民が混在している

- ・(中原区) 既在市民と新規市民の混在する街
- ・(大師) マンションがよく建つ
- ・(中原) 昔から人の出入りが多い(社宅など)
- ・(中原) 最近、小杉を中心に人口増加が激しい急に増えすぎている

○外国人が多い

- ・川崎区 外国人が多い アジア系 コリアンタウン
- ・1クラスに1~2人は外国人がいる(中原)

○まちづくりクラブが組織されているが、町会のなり手が少ない

- ・渡田まちづくりクラブ9町会で組織
- ・町会を巻き込んだ形で推進
- ・町会のなり手が少ない

- まちへの愛着が少ない
 - ・町に興味が少ない（川崎）まちへの愛着少ない→出席者
- 全国区として有名なものがある
 - ・（全国区）1. 川崎大師 2. 以前、京浜工業地帯 3. 江戸から続く東海道
- 幸区は川崎区と中原区の間ぐらいのイメージで、治安が良く交通アクセスがよいため住みやすい

■ステップ2「小さい単位のまちづくりのイメージは？」

- 範囲が広がる、狭まるとそれぞれメリット、デメリットが発生するので、丁度よい塩梅を見つけられるとよい
 - ・大きな範囲：×テーマがぶれる、○人が集まる
 - ・小さな範囲：×人が集まらない、○まとまりやすい
- 2000～3000 世帯の町会の単位ぐらいがよい
 - ・テーマによって規模は変わる
 - ・人材の面から 2000～3000 世帯ぐらいのまとまりがほしい
 - ・1%が興味を持って参加してくれると 20～30 世帯
 - ・顔見知りの関係がつくりやすい→×中学校区 ○小学校区
 - ・中学校区は人が集まらないが、まとまりやすい
- 近隣の 2～3 町会+PTA ぐらいの範囲が良い
 - ・学校区内の規模で、2～3 町会と PTA の合体企画
- 中学校区≒9 町会（4 グループテーマ型活動）程度の規模がよい
 - ・渡田社協 9 町会から移行されたような形態が当渡田まちづくりクラブ {交通・防災防犯・環境・コミュニティ} 4 グループ
- 使えるような場所はたくさんあるため、地域の特色にあわせて使えるしくみにする
 - ・公共施設：町内会館、学校の空き教室、子ども文化センター
 - ・民間の立派な施設など
- 使い方がわからない人でも分かりやすく、一律で使えるルールを共通のルールが必要

■ステップ3「若い世代をはじめ多様な世代の参加があるまちづくりにするには？」

- 若い人、働いている人、子育て世帯のライフスタイルが多様になっているので、声の掛け方など注意が必要
 - ・若い人を集める方法を知りたい
 - ・昼と夜の過ごし方ライフスタイルの違い

○子ども会を入口にしたまちづくりの若い担い手づくりをしくみ化してはどうか

- ・成功モデルをしくみにする
- ・子ども会は横のつながりもある
- ・子ども会を入り口にする→参加→スタッフ（このハードルが高い）
- ・このスキームをしくみに落とす
- ・お祭り、子ども会いろんなイベントで人を集まる“場”を作り人材発掘
- ・分かりやすい参加しやすい仕事を作る
- ・新陳代謝をうまくつかう
- ・具体的な引き入れ方をしくみにしたい

○マンション建設の説明会の時に、町会加入を促進し、管理費として払ってもらう

- ・業者による部分もある
- ・町会とマンションのコラボ
- ・町会の組織を利用する（無理かな？）

■ステップ4「エリアにおけるこれからの地域活動や中間支援のあり方は？」

○マンション建設の申請の時に、住民との協働で行政が指導するなどの連携をしてはどうか

- ・町会費の回収を促進

○近隣の状況を情報交換できると成功例を参考にできる

○新たなしくみのなかで、組織をつくるのは大変であるため、既存の組織の事務局機能を拡充することが大切

○区の地域振興課の職員が3年で異動しないようにする

3 グループ 南武線沿線中原区以北

メンバー：島岡さん、吉田さん、高松さん、刀根さん、萩原さん、森田さん



■ ステップ1 「エリアの特徴だと思えること」

- ・商業・農業・工業があるが、中原区は徐々に減少
- ・北部（高津、多摩）は緑も多いが、中原区は徐々に減少
- ・駅前に商店街がある。企業もある
- ・二カ領用水や平瀬川など、都市の水辺資源がある
- ・大山街道など歴史資源が多い
- ・大学が多い（多摩区）
- ・洗足学園がある（高津区）
- ・東京へのアクセスが良い
- ・便利なため、逆に人が流出していきやすい
- ・昼間住んでない独身の人が多い
- ・外国人の居住が多く、コミュニケーションが難しいのでゴミなどの問題がある
- ・新しい住人はエネルギーいっぱい。でも活動の時間ややり方の工夫が必要
- ・中原区はまだ開発が進み新しい住民が増えていく→新しい世代の人と一緒に活動をすすめていく必要がある
- ・マンションが多くなりビル風など住環境の悪化の問題も起きている

■ステップ2「小さい単位のまちづくりのイメージは？」

○一律の「小さい単位」を決めるのは難しい

- ・町内会単位がいいのでは。各町内会に集会所がある

→地域によって同じではない

- ・学区単位といっても、範囲や規模に片寄りがある

○課題のある地区の範囲でグループづくり

- ・課題のある地区でその関係する（ある）地域をグループとする（単位とする）

○リアルなつながりは中学校区？

- ・リアルなつながりは中学校区くらいでは
- ・防災や福祉を考えると顔の見える範囲のむすびつきが大切だ

○小さい単位をどう支援するのか？

- ・新しい組織をつくるの？組織ばかり増えても問題
- ・場所・資金・人材が必要になる

○ヨコのつながり「ネットワーク」を作ることが大切！

- ・交流、情報交換が大切
- ・小杉ではエリマネを中心にさまざまな団体が連携している。小学校6校、中学校4校、高校私立2校、町会7つ、商店街2つ、行政、各マンションなど、年2回は交流会を実施

■ステップ3「若い世代をはじめ多様な世代の参加があるまちづくりにするには？」

○子どもと親に、学校のつながりで参加してもらおう

- ・何らかの方法で中高生の意見を集める
- ・PTAを取り込む
- ・学校で、生徒に対し地域で防災訓練をする時に参加させるようにして後日感想を提出させる

○学校が地域参加を取り入れるしくみがあるといい

- ・学校を通して子どもたちに参加を呼びかける
- ・地域活動に参加した生徒は学校に報告したり、単位をもらえたりするといい

○若い人たちに、準備や当日運営で体を動かしてもらおう

- ・町会の祭に中学生に参加してもらおう
- ・商店街のイベントに大学運動部に参加してもらおう
- ・エリマネのイベントにアルバイトスタッフに参加してもらおう
- ・若い人に行事当日や、準備のときに参加してもらおう

○若い人と企画づくりをするなど参加しやすい入口をつくる

- ・ネットでつながった若者とイベントや企画をする

- ・インターネットを活用して事前に意見を集める
- 参加しやすい楽しい体験ができるようにする
 - ・地産地消で新鮮で安い野菜「市」の公設→子育て世代や高齢者
 - ・創作料理のコンテスト
 - ・宮前区C級グルメ大会創作料理スイーツづくり
- 若者が集まるコミュニティカフェがあるといい
 - ・若い人が集まるコミュニティカフェが、関わりの入口になるといい
- 若い人たちと活動時間が合わない
 - ・若い人たちと、今の活動の中心世代との活動時間が合わない。一緒に活動するためには土日の会議にするなど対応が必要？

■ステップ4「エリアにおけるこれからの地域活動や中間支援のあり方は？」

- 活動を促すためには場所・資金などの情報提供が必要
 - ・小さな活動支援をしていくためには、多様な活動場所、情報交流が大切
 - ・企業の会議室を活用できるとよい
- 活動団体へ支援ニーズのリサーチをする
- 分野横断的な活動の情報交換の場があるといい
 - ・同じテーマに取り組む人たちだけでなく、福祉、子育て、…さまざまな活動との情報交換ができるといい
- 活動を担う人を育てるリーダー研修が必要
 - ・リーダーになる人の研修が必要。いろいろな人の話をきく機会など
- 区ごとに直接的に課題を解決する組織も必要
 - ・区単位の取組みも大切
 - ・区ごとの課題を示し解決につなげる組織が必要
 - ・様々な組織が参加し意見交換、情報交換することは大切
 - ・区民会議は、いろいろな人が参加しており可能性がある。どういう方向になるの？

4 グループ 南武線沿線高津区以北+田園都市線

メンバー：久野さん、増田さん、永野さん、荒川さん、村瀬さん、園部さん



■ステップ1 「エリアの特徴だと思ふこと」

○坂が多い

- ・丘、坂が多い。電動自転車が多い
- ・坂が多い

○大山街道や枳形城跡などの歴史がある

- ・大山街道、枳形城跡などの歴史がある
- ・北条氏の領地だった

○多くの農地、緑が残っているが、徐々に減ってきている

- ・緑が減ってる。昔は田んぼもあった
- ・畑が多いところ
- ・援農が大切

○マンション化、敷地の細分化が進んでおり、人口が流動的

- ・マンション増えている
- ・マンションが多いところ
- ・農地などの広い土地は相続でマンション化している。細分化も進んでいる。賃貸も多く、人口が流動的

- 東京へのアクセスが良くて、若い人が多い
 - ・若い人が多い
 - ・東京へアクセス良い
- 人・モノどちらの地域資源も多いがまとまりにくい。新旧住民の交流が課題
 - ・人もモノも資源多い一方で、まとまりにくいことが課題
 - ・農家、新しい住民が混在している
 - ・市民活動をやっている人、地域活動をやっている人のどちらもいる。結びつけること大切
 - ・コミュニティカフェをURのコンフォールの1Fで行なっている
 - ・イベント多い。川崎の真ん中（高津区）
 - ・高齢者の傾聴などが大切。空き家をもっている。コミュニティの場所がほしい

■ステップ2「小さい単位のまちづくりのイメージは？」

- 誰でも利用できる使いやすい施設をつくる 縦割りでルールがガチガチ
 - ・誰でも利用出来る施設をつくる
- 地域の特長を活かしたカフェや居場所を半径100mに1ヶ所つくる
 - ・カフェ単位で考える
 - ・半径100mくらいの所に1ヶ所のカフェや居場所があると乳児母子や高齢者が来やすい
- 小さくまとまらない小さなパワー
 - ・小さくまとまらない小さなパワー
 - ・小さくても閉じるのではなく、地域の魅力で外から人がくる場に。外に発信できる場に
- ココだけ！地域の特長を活かした唯一無二の場づくり
 - ・地域の特長をいかした唯一無二の場づくり
- 場所貸しで運営
 - ・コモンカフェのように日替わりで店主が変わるのも面白い
 - ・場所は貸し出しスペースで運営をまかせる
- マンションに交流の場をつくる
 - ・マンション間の交流をつくる
 - ・マンション建設に合わせてコミュニティの場を生み出すしくみがあると良い
- 多様な公共施設をコーディネートする人がいると良い
 - ・公共施設（小中学校、こ文、いこいの家、生涯学習館、神社など）のコミュニティコーディネーターがいると良い
- 直売所もみんなで関わってコミュニティの拠点にしたい
 - ・コミュニティの拠点は建物である必要ない
 - ・直売所のようなスペースもコミュニティの場になる可能性がある

○生涯学習支援施設を地区単位でつくりたい

- ・生涯学習支援施設を地区単位に

■ステップ3 「若い世代をはじめ多様な世代の参加があるまちづくりにするには？」

○若い感度の高い人が多いので、まちづくりでもおしゃれで美味しい生活文化の追求が必要

- ・おしゃれなコト
- ・コーヒーがおいしいコト
- ・デザイン力をとりいれよう！
- ・アンテナをはっている人に引っかかるおしゃれな生活文化
- ・小泉農園のとりくみもオシャレでおいしい

○いろいろなノウハウを持った若い子育てママが稼げる取り組み（一人では難しいこともグループで可能に）

- ・団体コラボで稼げるイベントを多発する
- ・子育てママ達に地元で稼げる仕事をつくる
- ・地域に世代交流できる働き場がほしい

○子どもが参加する昔からのイベントで、若い親と地域をつなぐ

- ・公園の解放 公園でのイベントを作る
- ・小学校をキーポイントとした地元イベントをやると若い親もついてくる

○三世代交流をアピール

- ・核家族が多いので世代が集える場をアピール

○中・高生大学生のまちづくりへの参加の機会をつくる

- ・時間の変更が必要
- ・マンションでの映画会など興味をひく場
- ・地域のコアなテーマ
- ・映画やアニメを舞台になると良い（サンレッドのような地域ネタ）

■ステップ4 「エリアにおけるこれからの地域活動や中間支援のあり方は？」

○市民と行政がまちづくりの相談する場

- ・似たようなイベント・成果が多すぎる
- ・イベント重視でない、成果を求めない、まちづくりを行政・市民ともに語りたい

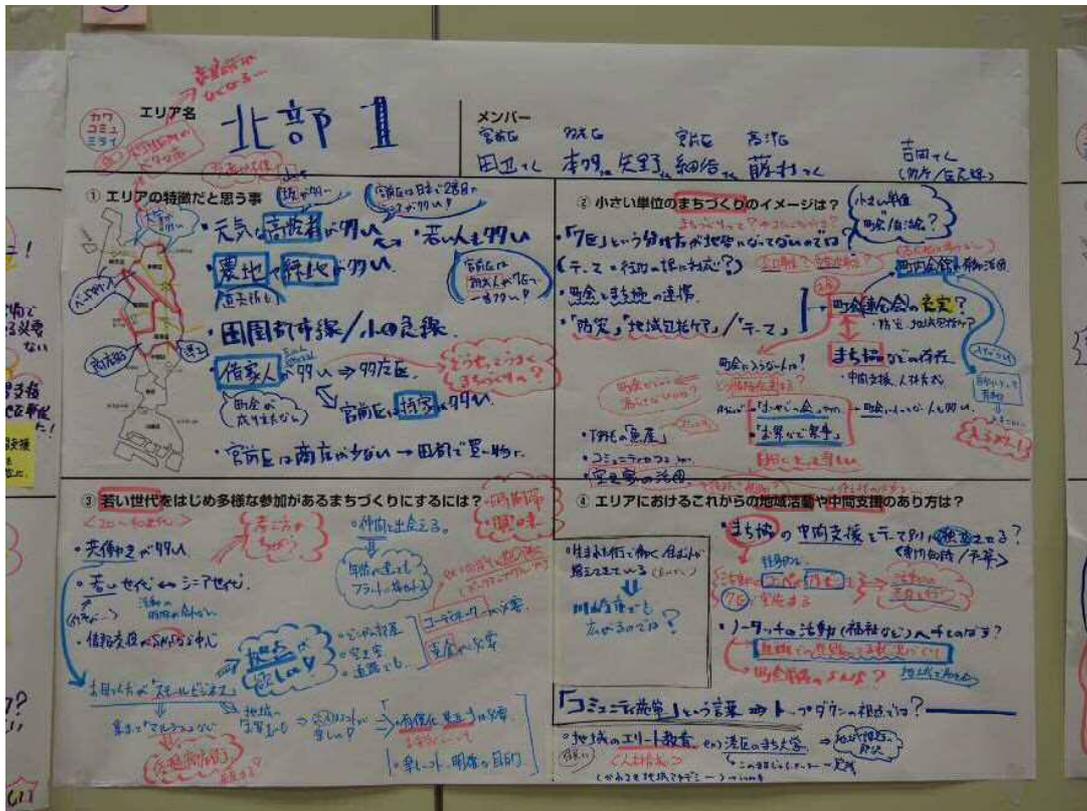
○コーディネーターの養成が必要

- ・まち協はまちづくりコーディネーターを養成してコミュニティ支援をする
- ・行政と市民をつなぐコーディネーター

- コミュニティの代表組織をつくろう（県や国にも話ができるような）
 - ・いろいろなコミュニティの代表組織を持とう
 - ・こまごまと行政に言うよりまとめて言おう
- 個人としてもまちづくりに参加しやすく
 - ・新しい住定を作る時に道路スペースをとる町づくりを行政で線引きできる税制がほしい
- 情報の公開、伝わりやすく
 - ・ネットワーク公開情報紙の配布
- 地域相談にのってくれる行政の窓口が必要
 - ・社会課題ごとの窓口があった方が良いかもしれない
- 中間支援組織って何か、はっきりさせてほしい（区によっても違う）
- 高齢化で地域社会が一層大切になっている。今回のワークショップの結果を実行につながる施策にしてほしい

5 グループ 北部1

メンバー：田辺さん、本多さん、矢野さん、細谷さん、藤村さん、吉田さん



■ステップ1 「エリアの特徴だと思ふこと」

○高齢者が多い

- ・元気な高齢者が多い
- ・宮前区は日本で2番目にシニアが多い！

○若い人が多い

- ・若い人が多い
- ・宮前区は新成人が7区で一番多い！

○山や坂が多い

- ・山や坂が多い
- 坂が多いから高齢者も足腰が鍛えられて元気
- ・坂を上った先だと交通が不便

○農地や緑地が多い

- ・農地や緑地が多い
- ・宮前区、多摩区には直売所が多くある

○田園都市線や小田急線など都心とのつながりが強い

- ・田園都市線/小田急線が通っており、都心に通いやすい

- ・都心のベットタウンである
- 多摩区は借家人が多く、宮前区は持ち家が多い
 - ・借家人が多い
 - 多摩区では町会が成り立たない
 - どうやってまちづくりに引き入れるか
 - ・宮前区は持家が多い
- 宮前区には昔ながらの商店が少ない
 - ・宮前区は商店が少ない→田都で買い物に
- 多摩区は大学が多い
 - ・多摩区は大学が多い
 - 大学生向けのチェーン店などが多く、賃貸経営となっている
 - 向ヶ丘遊園駅南口は商店街がなくなっている

■ステップ2「小さい単位のまちづくりのイメージは？」

- 小さい単位=町会/自治会程度が良い
 - ・「7区」という分け方が地勢に合っていないのではないか
 - ・町会に入らない人をどうフォローし、情報伝達することができるか
- 小さい単位=「おやじの会」「お祭り」など
 - ・町会に入っていないなくても地域に参加できるテーマがある
- 拠点としての町内会館
 - ・拠点として町内会館を有効に活用できるとよい
 - ・現在は入りづらい印象がある
 - 自分にとって有効に活用できるなど、メリットがあれば使うはず
- 町会/自治会でできること・まち協等ができることがそれぞれある
 - ・町会は「防災」「地域包括ケア」がこれからのテーマとしてある
 - まち協は「中間支援」「人材育成」などを担っている
- 地域のスペースも単位となる？
 - ・下野毛にある昔ながらの魚屋が地域のコミュニティの核となっている
 - ・コミュニティカフェなどをうまく活用できると良い
 - ・空き家の活用はうまくいっている事例を聞かない

■ステップ3「若い世代をはじめ多様な世代の参加があるまちづくりにするには？」

- 若い世代 = 20~40代と考えると、地域での活動が難しい世代である
 - ・今の若い世代は共働きが多い
 - ・仕事があるなどして、シニア世代と活動の時間が合わない

- ・情報交換の手段が SNS などを中心としている
- 子育て世代のお母さんが「スモールビジネス」をできる環境作り
 - ・子育て世代のお母さんは空き時間に地域でできる「スモールビジネス」をしている
 - 小商いとなり、地域のまちづくりと繋がるようになると良い
 - ・集まって「マルシェ」などを行っている
 - 地域の「お祭り」にも出店している例がある
 - 出店するコト自体が楽しいという意見も多い
 - ・仲間と出会えるということが重要である
 - 年齢が違ってフラットに接せれる
 - ・今の子育て世代は有償化や見返り、楽しいコトや明確な目的が必要
 - お弁当が出るだけでも違う
 - ・SNS を使っていることから、「仮想商店街」のようなものに発展するかもしれない
- 子育て世代のお母さんは地域に拠点を欲している
 - ・拠点が欲しい！
 - ・マンションなどの一室でもどこかスペースがあると良い
 - ・登戸では「まちなか遊縁地」という空き地を使った取り組みがある
- 活動を手助けするコーディネーターや資金が必要
 - ・コーディネーターが必要
 - ・資金が必要

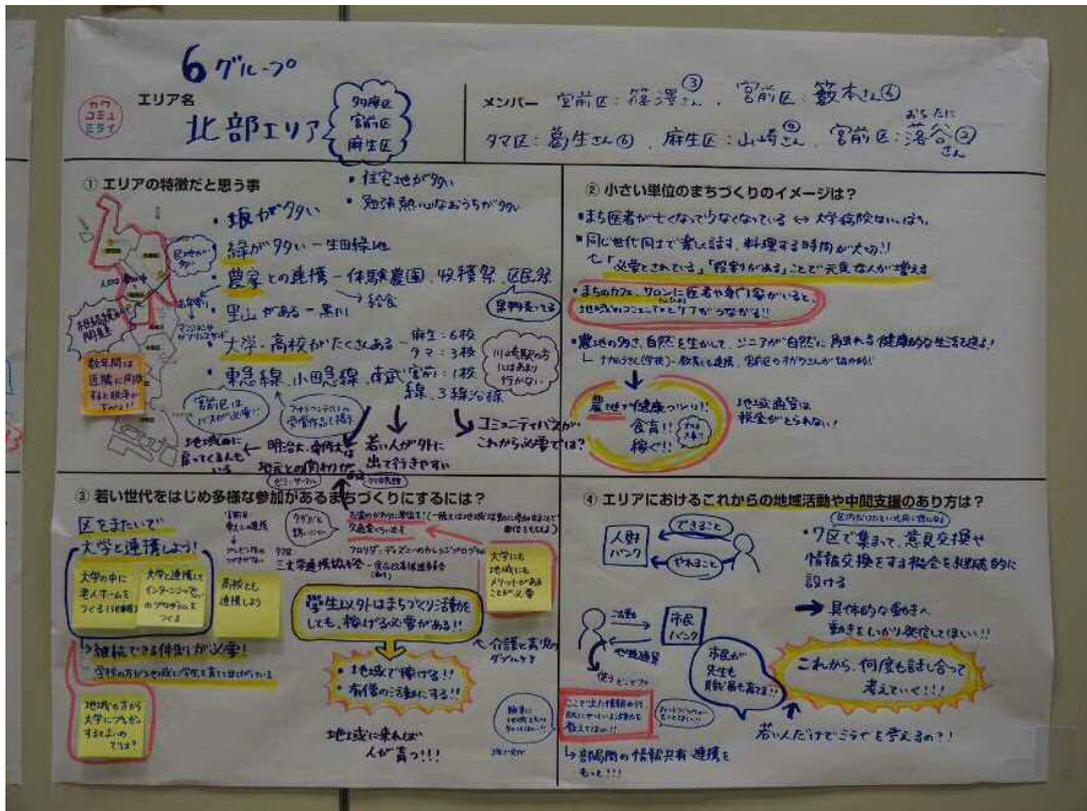
■ステップ4 「エリアにおけるこれからの地域活動や中間支援のあり方は？」

- 生まれたまちで働く事例が増えてきている
 - ・生まれた街で働く住む人が増えてきている（立川など）
 - 川崎市でも今後そういった広がりが増えてくるなら悲観する必要がなくなる
- まち協の中間支援で実施していることをテーマ別に独立させて地域をサポートできると良い
 - ・まち協の中間支援で実施していることをテーマ別に独立させて地域をサポートできると良い
 - ・専門知識を持つ人の導入や予算を生み出す必要がある
- まち協活動のコンペやプレゼンを7区で実施することで情報を共有
 - ・活動のコンペやプレゼンを7区で実施することで情報の共有をする
 - ・競い合う視点も重要である
 - ・ノータッチの活動（福祉など）へ手をのばす？
- 近所で顔見知っている関係性をもっと多く生み出す
 - ・地域で助け合う関係性をもっと生み出せると良い

- ・町会単位のスナが生まれると良いのではないか
 - 「コミュニティ施策」という言葉は行政のトップダウンな視点
 - ・「コミュニティ施策」という言葉自体がトップダウンの視点では？
 - 地域の担い手のエリート教育を実施できるといい
 - ・地域の担い手のエリート教育を実施できるといい
- ex) 港区のまち大学 このままじゃもうおしまい完成→地域課題の解決

6 グループ 北部2

メンバー：篠澤さん、藪本さん、葛生さん、山崎さん、落谷さん



■ ステップ1 「エリアの特徴だと思うこと」

○坂が多い

- ・坂が多い

→宮前区はバスが必要!

→コミュニティバスがこれから必要では?

○緑が多い

- ・生田緑地など緑が多い

○農家が多く、農に関連した催しも多い

- ・農家との連携がよく見られる
- ・体験農園がよく開催されている
- ・収穫祭、区民祭などで農産物、果物を売っている
- ・黒川に里山がある

○大学が多い

- ・大学・高校がたくさんある
- ・麻生区：6校、多摩区：3校、宮前区：1校
- ・明治大・専修大はゼミやサークルの活動で地元との関わりがある

○ 3つの鉄道の沿線地域である

- ・ 東急線、小田急線、南武線、3線沿線
 - ・ 東急線ではフォトコンテストの受賞作品を掲示している
 - ・ 新宿や渋谷などアクセスのいい場所に若い人が出て行きやすい
- 地域に戻ってくる人もいる
- ・ 川崎駅周辺との一体感はない

■ ステップ2 「小さい単位のまちづくりのイメージは？」

○ 昔は町医者がコミュニティの要のひとつだった

- ・ まち医者がなくなって、身近な医療機関が少なくなっている一方で、大学病院は増えているのではないか

○ すでにあるまちカフェやサロンにケアの専門家がおり、地域のコミュニティと深くつながれるとよい

- ・ まちのカフェ、サロンに医者や専門家がいると地域のコミュニティとケアがつながる！！

○ 多世代交流もいいが、同じ世代で話すのも健康やコミュニティの維持につながる

- ・ 同じ世代同士で楽しく話す、料理する時間が大切！
- ・ 「必要とされている」「役割がある」と感じることで元気な人が増える

○ 農地を拠点に健康づくりや食育、地域経済の活性化ができるとよい

- ・ 農地で食育を
 - ・ 農地の多さ、自然を生かしてシニアが自然に触れる健康的な生活を送るとよい
- ナカムラさん（学校）教育とも連携、宮前区のおガワさんが協力的！
- ・ 農地という資源を活かして、地域で稼ぐしくみが作れるとよい

■ ステップ3 「若い世代をはじめ多様な世代の参加があるまちづくりにするには？」

○ 区をまたいで大学と連携しよう！

- ・ 大学の中に老人ホームをつくる
- ・ 学校の方が地域に学生を育ててほしい
- ・ 地域の方から大学にプレゼンするとよいのでは？
- ・ 高校とも連携しよう
- ・ 宮前区：東大との連携がうまく継続しなかった
- ・ 地域に来れば人は育つ！！

○ 地域に関わる学生にもメリットが必要

- ・ 学生にはお金のかわりに単位をあげるしくみがあるとよい

- ・学生にも、交通費くらい出す（一橋大は地域活動に参加することで単位をもらえる）
 - ・大学にも地域にもメリットがあることが必要
 - ・メリットがない相手を活動に誘いにくい
- 継続的に大学と連携するしくみや体制が必要
- ・大学と連携してインターンシップなどのプログラムをつくる
- 継続できる体制が必要！
- ・フロリダ：ディズニーのカレッジプログラム
 - ・多摩区：三大学連絡協議会がある。専修大学と食品改善推進委員会で連携した
- 学生以外はまちづくり活動をして、稼げる必要がある！
- ・地域で稼げる必要がある
 - ・有償の活動にする！
 - ・介護と育児のダブルケアを抱える人もいる。余裕がないとまちづくり活動はできない
- 区の職員に地域をもっと知って欲しい
- ・地域で職員を育てても、3年で交代してしまう
 - ・職員がもっと地域を良く知り、行政機関との橋渡しをしてほしい
 - ・市民が先生も職員も育てる！

■ステップ4 「エリアにおけるこれからの地域活動や中間支援のあり方は？」

- 人材バンクなど活動したい人のできることとやれることを活かす組織が必要
- ・活動したい人のできることややれることをうまく活かしたい
- 地域通貨は、得た通貨を使う循環を生み出すのが難しい
- ・地域通貨はどこで使えるのか？
 - ・市民バンクのようなものが必要ではないか
- 話し合いの場が出た情報のうち、既にやっている活動等を教えて欲しい
- ・部局間の情報共有・連携をもっと強化する必要がある
 - ・せっかく話し合いをしたので、フィードバックがほしい！
- 7区でコミュニティ施策について話し合う場を継続的に設けながら、これからの地域活動や中間支援について考えていけるとよい
- ・7区で集まって、意見交換や情報交換をする機会を継続的に設けることが大切
 - ・区内だけで話し合うといつも同じ話になる
 - ・これから、何度も話し合って考えていくこと
 - ・若い人だけでミライを考えるの？！
- 話し合いなどの動きをしっかりと発信してほしい！！
- ・横浜市は発信が上手。川崎の方が先にやっている動きでも、横浜市の方が有名になることがある。コミュニティ施策を考えているということをしっかりと発信してほしい

